

学習に特異的な困難を示す生徒に対する 認知特性に応じた指導法の検討

—英語学習に特異的な困難を持つ生徒への英文法指導法の検討—

○鈴木恵太¹

上岡清乃²

北岡智子³

(¹高知大学教育学部)

(²高知大学総合人間自然科学研究科)

(³TECHNO CRAFT KOCHI)

KEY WORDS : 認知特性 英文法 指導

I. 問題と目的

本研究では、学習に特異的な困難を示す生徒 2 名を対象に個々の認知特性に応じた英文法指導を行い、その教育効果を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

対象は通常高等学校に在籍する男子生徒 2 名 (A 児および B 児) で、両名とも発達障害の可能性が高いとの医学的診断を受けている。両名とも英語学習に対して特異的な困難を示しており、アルファベットの混乱や、英単語や文章の読み書きおよび意味などの基礎的な定着の困難さがみられた。アセスメントとして WISC-IV や DN-CAS などを実施したところ、A 児および B 児ともに英語学習に困難さを示す認知的背景として視覚系情報処理の速度と正確性の弱さが考えられた。さらに、A 児は視覚情報をもとに推理し思考する力の強さが、B 児は聴覚言語系情報処理の強さが考えられた。

2. 指導方法

中学校レベルの基礎的な文法知識を身に付け、覚えた文法を活用して問題を解けるようになることを目的とし、英文法指導を行った。英文法指導では、文法項目ごとに「まとめカード」(Fig.1)を用い、基礎的なルールの理解と記憶の定着を図った。「まとめカード」は、基礎的な情報のみを焦点化したもので、1セッションに学習する情報量を最小限に留めている。さらに、ルールの重要な一部分を隠すことができ、生徒自身がめくって正答を確認できる。また、焦点化された基礎的なルールの理解および記憶がなされていれば解ける基本的な穴抜き問題も添付している。

	不定詞とは	to + 動詞の原型
1	～するために…する	… + to + 動詞の原型
	Why ~ ? に答える	To + 動詞の原型 (～するためです。)
2	～して〔形容詞〕	〔形容詞〕 + to + 動詞の原型

Fig.1. 「まとめカード」例 (不定詞①)

3. 手続き

A 児は X 年 6 月から X+1 年 1 月までの期間、B 児は X 年 5 月から 12 月までの期間、週に 1 回の頻度で、1セッション 30 分間として指導を行った。A 児は全 17 セッション、B 児は全 12 セッションを行った。

指導に先立ち、英文法の習得度を確認し、指導対象となる文法項目を選定するためのプレテストを実施した。新規の学習をした翌週および翌々週の 2 週にわたり、短期的な記憶の定着を確認するため、択一式および記述式のポストテスト 1 を実施した。また、指導終了後より一定期間経過後に、長期的な記憶の定着としての指導効果を測定するためのポストテスト 2 を行った。

4. 倫理的配慮

本研究は高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門

研究倫理規則に基づいて行われた。研究に先立ち、本人および保護者に研究の内容を書面にて説明し同意を得た。

III. 結果

英文法指導の結果を Fig.2 に示す。A 児および B 児ともに、指導前のプレテストに比して指導後のポストテスト 1 およびポストテスト 2 における成績の向上がみられた。

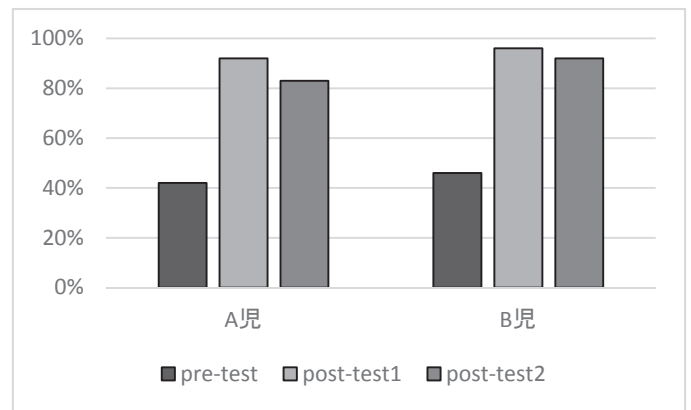


Fig.2. 英単語指導平均結果 (正答率)

IV. 考察

A 児の各テストにおける正答率は、プレテストが 42%、ポストテスト 1 が 92%、ポストテスト 2 が 83% であった。さらに、B 児の各テストにおける正答率は、プレテストが 46%、ポストテスト 1 が 96%、ポストテスト 2 が 92% であった。この結果より、指導による成績の向上と、指導終了から一定期間後の定着が確認された。

本研究にて用いた「まとめカード」は、生徒自身が操作するため、思考・推理する時間と記憶する時間を個々のペースに応じて配分することが可能となり、主体的な学びの促進にも効果的であったと考えられる。また、本研究における英文法指導では、①新規の学習、②選択式の問題、③記述式の問題といった 3 回のセッションにわたって 1 つの文法項目を反復学習した。この三重構造が、長期記憶への定着をより確実なものとした 1 つの要因として考えられる。

両名はともに、視覚系情報処理の速度と正確性の弱さが英語学習における困難さの認知的背景であると考えられた。そこで、視覚情報をもとに推理し思考する力が認知的長所である A 児については、「まとめカード」を見ながら基礎問題を解く過程を丁寧に行うことにより、ルールの入力および理解をより確かなものとするを重視した。一方、聴覚言語系情報処理が認知的長所である B 児については、視覚情報はよりシンプルなものを持示し、読み上げによる聴覚的なフィードバックを繰り返すことにより、ルールの入力および理解を図った。このように、同様のつまづきを呈する生徒であっても、その認知特性は様々であり、各々の認知特性を十分に理解して指導を進めることが重要であると考えられる。

(SUZUKI Keita, KAMIOKA Sayano, KITAOKA Tomoko)